

課題【最優秀作品】

岡山県教育委員会
教育長賞

未来を照らす『ストロベリーライフ』

岡山県立倉敷天城高等学校

二年 秋 山 恵 里

自分を認めてもらいたい、誰かに求めてもらいたいと願いながらも、プライドを傷つけられることを恐れる。変わり映えしない日々をどうにか変えたいのに一歩を踏み出せない臆病さ。そんな主人公、恵介の気持ちがある。私自身どこか重なりあう気がしてやまないのだ。恵介の家族や仕事そして母に対しての思いが変わっていく姿を追いかけ、私の道しるべとなるものを見出すためにこの本の中へ旅に出る。

先の見えない将来に自分の理想の姿を思い描き、その姿に現在の自分を近づけていきたいと願い努力する日々。その反面、理想と現実の狭間でもがき続けながら

も、時には自分にとって不本意なことからは逃げ出してしまいたいと思う弱い自分が存在する。不本意に思っていたことがいつしか自身の本意へと変わっていった恵介。振り返ってみると恵介の最初のステップは、恵介自身が今まで避けてきた農業に向き合い、実際に母を自分の手に取ってみるということだった。一歩を踏み出さなければ始まらない。それは今の私にも通じるものであると思えた。大切だと分かっている、どうしても苦なことや面倒なことは避けて通りたくなってしまふ。しかしここで踏み出せば何かが変わるかもしれない。また、変われなくても何かを得ることができる。踏み出さないことが一番の速回りであり、自分の成長を妨げているのだ。今の私は最初の一歩をまだ踏み出せていない。しかし、恵介の示してくれた行動は私の新たな一歩への大きな原動力となるような気がした。

この世では私は時折、労働とそれに対する対価とがつり合っていないのではないかと疑問に思うことがある。この本の中に出てくる「農業」という職業が代表的な例だと考える。種まき、収穫、天候や害虫への対策。仕事は挙げればキリがない。休みはなく過酷な仕事から得られる収入は季節によって異なり需要と供給のバランスによっても変動するため安定しないとされている。

三百六十五日、二十四時間を農作物に捧げていると言つても過言ではない。そんな中で恵介の父の言葉が胸に響いた。

「楽な仕事なんてない、楽じゃないから仕事なんだ。」

そしてこの言葉を自分の中でこのように解釈してみる。

「楽にやりがいを得ることはできない、楽じゃないからこそやりがいを得ることができるのだ。」

自分が精魂込めた農作物を受け取る消費者が何を求めているのかを恵介の父はきつと理解しているのだろう。農作物を届ける相手を思うがゆえ、彼の中には想像を遙かに超えるエネルギーが生まれてくるのだと思う。そして父の言葉を恵介自身が上手く咀嚼することができたので、どんなに周りから支持されなくても、自分の信念を貫き大きな夢や目標にゆつくりと着実に向かつていくたのだろうと思う。自分に求められているものを考え、掴みとるために、もがき苦しみ、それでも泥臭く地道な努力を重ねる恵介は輝いている。彼の心の中には父の言葉が支えとしてあつたはずだ。

彼の努力は望月イチゴ狩り農園という形になった。家族に支えられ、消費者に支えられる農園はまるで社会の形を見ているような気分になった。環境、場所は違えど

も、私も社会の中で沢山の人に支えられていることに感謝しながら、自身も社会の中で誰かを支えたいと将来の自分を想像させるものであつた。

この本を旅したことで私自身の先の見えない将来に、自分がどう在りたいかを見出すヒントをもらった。何事も最初の一步を踏み出すことが大切なのだ。人それぞれ夢や目標は違えども確かに変わらないことは、誰かの為に、何かの為に、いつの日かの自分の為に、進み続けること。地道な努力を重ねたその後にはじめてやりがいを感じられるのだ。恵介はこれができたからこそ母も家族も様々な形で応えてくれたのだと思う。

未来を模索している時期に恵介と出会えたことは私にとって大きな転機であつた。社会の中に確かに存在していたフリーランスのグラフィックデザイナーとしての恵介。父、夫としての恵介。そして望月イチゴ狩り農園の一員としての恵介という様々な姿は、私に現実の厳しさを示しながらも、どこか人間味にあふれるあたたかさで私の将来を照らしてくれた。

恵介は今後も、幾度も困難に出会うにちがいない。しかしその折々に彼の努力の結晶である母が彼に勇氣と希望をもたらずだろう。母が導いてくれた恵介との、またない出会い。これこそ「いちご一会」と呼ぶのではな

いだろうか。この出会いに感謝すると共に、これからの望月家の『ストロベリーライフ』が甘酸っぱくて実りあるものになることを祈るばかりである。

荻原 浩『ストロベリーライフ』（毎日新聞出版）

本人の言葉

喉から手が出るほど欲しかった賞を頂けて大変感謝しています。

というのも、昨年度は優秀作品という結果を頂き嬉しかった反面、最優秀作品にあと一步及ばず大変悔しい思いをしたからです。そのため、今年度の読書感想文コンクールに対する熱意は人一倍強かったと思います。何度も本を読み返し、時にはシャンプーをしている最中に思い浮かんだフレーズもありました。

積み重ねた思いと時間が実を結び、喜びと感謝の気持ちで胸が一杯です。一生忘れることのない、かけがえない作品を生み出すことができました。

これからも大好きな読書を通じて知識を深めると共に、一冊一冊の本との出会いを大切にしていきたいです。